

## 二年文学国語 戯曲『父と暮せば』から

静岡県立島田高等学校教頭（国語） 原田まや子

### 1 『父と暮せば』の教材としての今日的意義

井上ひさしの戯曲『父と暮せば』は、1994年（平成六年）にこまつ座で初演され、平成十年に新潮社より刊行、現在、東京書籍「文学国語」（文庫701）の戯曲の単元に採用されている。2004年（平成十六年）には黒木和雄監督により映画化され、宮沢りえ、原田芳雄が主演し、宮沢りえはこの年のブルーリボン賞において主演女優賞を得ている。また、2015年（平成二十七年）には、山田洋次監督が、その五年前に亡くなった井上ひさしに捧げるとし、『母と暮せば』という映画を制作している。この年は、戦後七十年の年でもある。

昨年（2024年）十一月、日本原水爆被害者団体協議会（被団協）にノーベル平和賞が授与された。日本からの平和賞受賞は、非核三原則を提唱した1974年の佐藤栄作元首相以来で、二例目だという。十二月十日の授賞式では、被団協代表委員の田中熙巳さん（92歳）が記念講演を行い、ウクライナ戦争におけるロシアによる核の威嚇、パレスチナ自治区ガザ地区に対しイスラエルが執拗な攻撃を加える中で核兵器の使用を口にする閣僚が現れることに言及し、市民の犠牲のみならず「核のタブー」が壊されようとしていることに「限らない口惜しさと憤り」を覚える、と語った。

『父と暮せば』は、1948年、被爆から3年目の広島を舞台とした、父と娘の物語である。娘・美津江は、広島市内の図書館に勤める二十三歳の女性として登場する。女子専門学校を二番で卒業した才女であり、陸上競技部に所属する「お転婆」でもあったとしている。女子専門学校とは、学校教育法施行以前の日本における高等教育機関であり、広島県立広島女子専門学校は、昭和3年に設立され、現在の広島県立広島大学の源流である。広島市の「福吉屋旅館」の娘として生まれ、母親を幼少期に失い、父親と二人暮らしであったという想定だ。この美津江が、冒頭、稲光を怖がり、「おとったん、こわーい」と家に駆け込む。父・竹造は、座布団を被り、押し入れに入れと招くが、実はすでにこの世の人ではない。三年前から稲光をおそろしがるようになった美津江。被爆の記憶に苦しむ美津江の心に、父が寄り添う、1948年7月31日から8月3日、五日間の二人の会話が戯曲『父と暮せば』である。

広島、長崎の被爆、日本の終戦から八十年目となる。『はだしのゲン』が学校図書館の蔵書として不適切であるとして小中学校の学校図書館から撤去することが松江市議会に陳情されて話題となったのが、2012年（平成二十四年）で

あり、2023年には、広島市の平和教育副教材から『はだしのゲン』が削除された。現在の高校二年生は、2007年（平成十九年）に生まれ、前述の『母と暮せば』上映時に小学校低学年である。この史代の漫画『夕風の街 桜の国』の映画化が2007年であり、高畑勲監督作品『火垂るの墓』は、2018年を最後に地上波で放送されていない。（この原稿が完成した後、2025年8月15日に七年ぶりに地上波で放送された。）2021年、柳楽優弥、有村架純、三浦春馬を主演に『太陽の子』という、戦時下日本の原爆研究を題材とした映画が制作されたが、公式サイトはこの映画を「時代に翻弄されながら全力で駆け抜けた若者たちの、青春群像物語」としている。

つまり、令和七年の高校生は、戦争の悲惨、広島、長崎の被爆について、およそ共通した知識、物語を持っていない。十二月初旬に、修学旅行で広島を訪れ、その後『父と暮せば』の学習のまとめを行った際の生徒の感想に「自分たちは原爆のことを美化しているのではないか」というものがあつた。おそらく、美化、という言葉で生徒が言おうとしたことは、これまで自分たちが触れ得た原爆に関わる物語は、被爆を「原爆」という突然の悲劇、抗えない時代の流れ、運命の時という舞台装置として登場させており、それらでは見えなかった苦しみに、今回実際に訪れて触れ得たということではないか。もちろん、『はだしのゲン』における苦しむ人々の姿や、『火垂るの墓』の主人公、清太の母親が空襲で犠牲となった姿などは、漫画、アニメーションではあるが、親子で観たとしても、小学生、中学生にとつてどのようなものであるか考える必要がある。映像には、心に焼き付く強烈さ、予測を超える子どもたちの心への暴力性がある。しかし、その時、ゲンである中沢啓治が、清太である野坂昭如が、少年の日に受けた戦争という暴力の記憶を、後世の私たちが忘れず、どのように語り継げるのかという問いが立ち上がる。そして、その課題は、過去のゲンや清太のためであると同時に、2025年の現代において、決して遠くない場所で、爆撃に怯えながら飢えと寒さに苦しむ隣人のため、世界に生きる自分のためである。

『父と暮せば』は、美津江と竹造の二人の会話でのみ表現された戯曲であり、特定の一人、美津江の心のみを扱っている。活字を、実際に声に出して読み、美津江の気持ち、竹造の気持ちを想像して表すことで、現代の私たちが多少でも近づける傷と苦しみがある。「一瞬にして廃墟となったヒロシマ」「二十万人の犠牲」、これらの言葉からだけでは感じとることのできない、誰かの心に寄り添うことを軸にしながら、自分ではない視線で世界をまなざせることが文学作品の良さだろう。また、平和記念資料館で実際に資料に触れた時、その事実には生徒はそれぞれに恐怖や怯えを感じるはずである。その時、美津江と竹造の言葉、願いが生徒の心の中にあればよいと思った。生徒が資料館で一人佇む時、意識して思いつくことはなくとも、美津江と竹造の愛情が、平和を願う心を力強く支えてく

れる。これらの意図、思いから、今年度十一月、二年生文学国語において『父と暮せば』の授業を行った。

## 2 『父と暮せば』を読み解く

### (1) 木下さんという運命の存在

舞台は、四幕で構成されており、物語は、1948年の広島、比治山の近くの簡易住宅に一人で住む美津江が、勤める図書館の帰り道に雷が鳴り出し、稲光を恐れて家に駆け込む場面から始まる。七月最終週の火曜日と設定にはあり、これは、1948年の暦を見ると、7月の31日である。広島に、人間の頭上に、初めて原爆が落とされて三年目にあたる日の、六日前に物語は始まる。父、竹造は、押入れの上段の襖をあけて登場する。「おとつたん、やっぱあおつてですか」と押入れの下段に入りながら、美津江が父親の存在に戸惑う。それが明確になるのは三幕以降であるが、父竹造は三年前の八月六日、美津江の前で原爆の火に焼かれ、三日後に美津江はその場所でお骨を拾っているはずなのである。前週の金曜日から現れた父親の存在。美津江が寄こす麦茶、二人で分けた饅頭が食べられないところに、父親がすでにこの世の人ではないことが示唆される。では、なぜ竹造が八月六日の三年目を前に美津江の前に現れたか。それについては、一幕においては、竹造が「恋の応援団長」として現れたと自ら明言する。

死んだはずの竹造が姿を現した前週金曜日は、美津江に運命の恋が訪れた日である。美津江は、陸上競技部であったとともに、女子専門学校の昔話研究会に所属した女性で、二十三歳の現在は広島市の図書館に勤務している。そこへ、運命の人、木下さんが訪れる。木下さんは、岩手県出身の二十六歳。終戦まで、呉の海軍工廠で工員養成所の教官をしており、終戦から二年間は母校東北帝大の大学院に通い、この七月に、その理由は書かれないが、再びこの広島の地へ広島文理科大学の物理の教員として赴任した、という設定である。

呉は、明治二十二年、横須賀、舞鶴、佐世保とともに海軍の基地が置かれた地であり、海軍工廠は、戦艦大和が建造された国内最大規模の海軍の工場である。呉は海軍の町として市街電車が走るなど栄えた。『父と暮せば』の舞台である太平洋戦争末期から戦後においては、45年3月末、大和が沖縄へ向かう途中撃沈され、海軍工廠も6月に空襲を受けて二千人近い工員が亡くなっている。終戦とともに工廠は閉鎖された。東北大学を出て、この工廠の工員養成所教官だったという設定の木下は、まさに竹造が言うところの「ごついインテリ」であり、それゆえに文系学生を中心に学徒出陣もなされた時代において兵役を免れた存在であるため、1948年の夏に生きて美津江の前に姿を現す。二人の出会い、木

下が、美津江が窓口に座る図書館に原爆に関する資料がないかと尋ねてきたことである。

美津江が「ふだんのうちなら、おいとりませんですましてしまうんじゃないけど」と言うように、戦後アメリカの占領政策により、日本側の原爆に関わる調査研究活動は自由な発表を止められるなど、様々な制約を受けた。9月初旬には原爆開発を行った機関であるマンハッタン管区調査団を中心とした調査団が広島へ入り、日本政府はそれへ協力し、医学面において日米合同調査団が立ち上げられるなど、日米共同で被爆者の検診などが行われる。そこで収集した資料はアメリカに持ち帰られた。また、新聞などの刊行物に関しての取り締まり方針がGHQにより出され、原爆に関する報道と文学は検閲により厳しく制限を受けることになる。この検閲が廃止されるのは、1952年サンフランシスコ講和条約発効を待たなければならなかった。このような情勢下の1948年の広島図書館へ、美津江の恋の対象となる木下が、美津江に「原爆関係の資料がありますか。」と来ることには大きな意味がある。前述したように、木下は海軍技術中尉であり、国家や軍というものの、兵器開発における知識技術の扱いについてはよく知り得ているはずの人物なのである。呉の工廠で戦艦大和の建造は極秘であり、工廠を見下ろせる山林の高地部などには立ち入りが制限された。初めて図書館に訪れた木下の、その声の調子に美津江は理由のわからない「一途さ」を感じ取る。一途さの根拠は、二幕で、初めて二人が昼休みの比治山で二人きりで会い、そこで木下から語られた内容を美津江が竹造に報告する形で明かされる。

木下は、終戦の8月末、郷里の岩手に帰ることとし、広島駅から列車に乗りうとする。その際、列車の発車時刻まで時間があり、焼け野原を歩き回る。地面に腰を下ろそうとした時に、一瞬の高熱で溶かされた瓦に気づき、その形状に驚愕する。原爆について、その高熱の中で何が起こったかをよく知らないといけないと思い、道みち原爆瓦を拾う。科学的知識という専門性を持ち合わせ、かつ「知らないといけない」と思う木下の聡明さ、誠実さが「一途」として、被爆者である美津江の閉ざした心に一筋の光を投げかける。木下が終戦から三年後のこの7月に、東北大学大学院で学んだ後、広島文理科大学の物理教室の助手として赴任した経緯などは何も語られない。もちろん、そうしなければ、美津江と木下さんの被爆から三年目の邂逅が成立しないわけであるが、そこにも木下の、知性に裏付けられた具体的な努力と実践を行う人としての「一途」を読み取ることができる。木下さんの「知らないといけない」は本物なのだ。原爆が投下された広島で、何が起こっていたか、それを明らかにすることを使命として生きようとする木下の一途さに美津江の心が揺れる。この人だからこそ、三年前の夏以来、すっかり人がわりしてしまった美津江の心がときめいた。そして、その「ときめき」から竹造の胴体と、手足と、心臓ができたとして、死んだはずの竹造が美津江の

前に姿を現したのである。美津江の恋、竹造の存在、それは一つには、原爆という人間に対する巨大な暴力が隠蔽、忘却されることへの抵抗と、それを明らかにしようとする人間の尊厳をかけた力なのである。

この一途さが美津江の閉ざした心を叩く。窓口に來た木下さんに、ふだんはしない説明を美津江はする。

「原爆資料の収集には占領軍の目が光ってつてです。たとえ集めたとしても公表は禁止されとつてです。それに一人の被爆者としては、あの八月を忘れるよう忘れるよう思つてつてつて。あの八月は、お話もない、絵になるようなこともない、詩も小説もない、学問になるようなこともない、一瞬のうちに人の世のすべてがのうなつてつてつてつて。そがいなわけですけえ、資料はよう集めておらんです。それどころか資料が残つとるようなら処分してしまいたい思つぐらひです。うちも父の思ひ出になるようなものはなんもかも焼き捨ててしまひました。」

この木下さんへ向けた美津江の言葉には、木下への寄りかかりがある。資料がありますかと問いかけた利用者の木下に、資料になるようなものは何もない、あつても処分してしまひたいという、人を突っぱねるかのような回答は、自身が受けた本当の苦しみを知つてほしいという心の裏返しだろう。そうであるから、自身が父を亡くしたこと、それを美津江は木下さんに開示している。なにかも焼き捨ててしまふくらいの傷を自身が負つたということをも木下に伝えているのである。

この金曜日の、二人の初めてのやりとりを受けて、冒頭場面である翌火曜日（7月31日）に、木下さんは、大きな鰻頭を持つて美津江の窓口を再び訪れるのだ。美津江にとつてその鰻頭の意味は「大事中の大事」でそれを追求しないといけないと竹造は迫る。竹造が言う鰻頭の意味は、木下さんが一目で美津江の本来の姿を見抜いて氣に入つたこと、そして、美津江もまた木下さんを好いてい、つまり「たがいにより目惚れ」であることとしてい、美津江はそれを、「そがいなことはありえん。人を好きになるいうんを、うち、自分で自分にかたく禁じておるんじゃけえ」と否定する。竹造はそれに対し、なんとも思つていなかったらその場で突き返したはずだと鰻頭に美津江の恋心を重ねるが、この父娘の口論に隠れているのは、木下さんの美津江への優しさ、人への愛情である。「原爆資料はあるか」と尋ねた窓口の女性が、原爆で父を亡くしたと静かに答える。その彼女に、父親のことに触れるわけがなく、甘い鰻頭を持つて來る木下。竹造に、恋心があるとまで言われたら美津江はそれを否定する。だが、鰻頭を持つて再び現れた木下に、美津江の心はあたたかく緩み出しているのだ。そうであるから、木下の誘ひ、明日昼休みに比治山の千年松で会つてくれなひかという誘ひに美

津江は頷く。饅頭を寄こす木下さんの素朴な優しさが、美津江の心を緩ませ、その心の中にあるものを暗がりから蘇らせようとしている。木下さんへのときめきから蘇った父の姿。さらに、その心の蓋が開こうとする。

## (2) 美津江の再生 竹造とは何か

―願う―

一幕で、自称「恋の応援団長」と言い、美津江に木下がくれた饅頭の意味を考えさせた竹造であるが、二幕の冒頭においては、播鉢を持ち出しエプロンを着けて「じゃこ味噌」を作っている。第二幕は、一幕の翌日、8月1日水曜の夜である。その日、美津江は木下と昼休みに比治山で初めて二人で会い、さらに木下から、集めた原爆資料を図書館で預かってもらえないかとお願いをされ、菓子箱に入れた原爆瓦や曲がった薬瓶などを託されて帰った。また、夏休みのおはなし会を行っている美津江に、その原爆資料を用いて被爆体験を伝える「おはなし」が出来ないかと木下は提案していた。

原爆資料を図書館で預かるという願いについては、木下も「むりを承知」と言っており、美津江の答えは無理と決まっている。だが美津江は、原爆資料を大量に下宿に持ち込んだことで、下宿のおかみさんから「気味が悪い」と下宿を追い出されそうになっている木下の願いをその場で断れない。一日考えさせてくれと言い、翌日の昼休みに木下とまた会う約束をしている。竹造は、美津江が明日木下さんに会う際に、美津江から木下さんへ渡すために「じゃこ味噌」を用意しているのだ。饅頭の「お返し」として播鉢を持ち出し、美津江のために炒り胡麻を播る竹造のこの行動には、竹造の「恋の応援団長」としての役割が明確だ。

また一方で、木下が原爆資料の置場に悩むこのエピソードは、特に下宿のおかみさんの言動から、被爆が当時世間からどう捉えられていたかということも示唆している。『はだしのゲン』では、ゲンが放射線により髪が抜け、それを理由に学校でからかわれた。また、顔にケロイドを負った女性が、偏見と差別を受け絶望する姿も描かれている。美津江は、原爆の直接の熱線は避けたが、この三年のうちには、「原爆病」が出ていたことが「早引け」してきた美津江を心配する竹造の言葉からわかるようになっていく。見えない放射能に対する恐れは、被爆二世に対する差別も生んだ。美津江が木下とのことに積極的になれない理由に、生まれてくる赤ん坊を心配しているのかと竹造が問う場面がある。被爆により受けた苦しみの上に、偏見と差別という幾重にも加えられる被爆者に対する社会の加害性を踏まえる時、美津江の被爆による傷に寄り添おうとする木下の存在は、父である竹造にとって、最も自身に代わって美津江の傍にいてほしい存在であるはずだ。美津江と同様に竹造もまた、木下という人間を確実に見出してい

るのである。

―いかる―

竹造の「恋の応援団長」という側面から竹造を見ると、竹造は、美津江の恋に対する抵抗と葛藤、心の分裂として捉えることができる。竹造は、美津江の中のもう一つの心、分身であるという考え方である。それについては、作者である井上ひさしが「劇場の機知―あとがきに代えて」において次のように述べている。

ここに原子爆弾によってすべての身寄りを失った若い女性がいて、亡くなった人たちにたいして、「自分だけが生き残って申しわけがない。ましてや自分がしあわせになったりしては、ますます申しわけがない」と考えている。このように、自分に恋を禁じていた彼女が、あるとき、ふっと恋におちてしまう。この瞬間から、彼女は、「しあわせになつてはいけない」と自分をいましめる娘と、「この恋を成就させることで、しあわせになりたい」と願う娘とに、真つ二つに分裂してしまいます。

……ここまでなら、小説にも詩にもなりえますが、戯曲にするには、ここで劇場の機知に登場してもらわなくてはなりません。そこで、じつによく知られた「一人二役」という手法に助けてもらうことにしました。美津江を「いましめる娘」と「願う娘」にまず分ける。そして対立させてドラマをつくる。しかし一人の女優さんが演じ分けるのはたいへんですから、亡くなった者たちの代表として、彼女の父親に「願う娘」を演じてもらおうと思いつきました。べつに云えば、「娘のしあわせを願う父」は、美津江のこころの中の幻なのです。

竹造は、美津江のもう一つの心であり、「美津江の心の中の幻」であるからこそ、竹造もまたこの7月31日から8月3日の五日の中で揺れる。ふざけたようなものの言いで、二十三の娘から「ばかばかり言つて」などと軽くいなされる竹造だが、恋を明るく応援する竹造ばかりではない。作者の言う「亡くなった者たちの代表」としての竹造、という側面もまた重要だ。そうであるからこそ、美津江の頑なともとれる心を竹造は理解し、美津江とともに悩み、美津江にとってきびしいともとれる言動も見せる。

二幕で、竹造は木下への「じゃこ味噌」を仕上げ、それを瀬戸物に詰めてハンカチで包みながら、木下とのことについて美津江に問いかけるが、実際に、木下さんが美津江に託した原爆資料の一部、原爆瓦や被爆者の身体から出たガラスの破片などを見るこの場面では、次第に、被爆者の苦しみ、痛み自体を竹造が表現していく。美津江に、こう話したらいい、と「ひらめき」、話をしているうちに竹造自身が涙をこぼす。直接被爆に関わる話に、美津江は「やめて！」と竹造

に叫ぶが、それでも、竹造は語る。そして、「非道いものをおとしおったもんよのう。人間が、おんなじ人間の上に、お日さんを二つも並べくさつてのう」と原爆に対する怒りをあらわにする。そして、木下さんに気に入ってもらおうと美津江に原爆資料をおはなしに入れることを勧めたが、それは広島の人間にとってはずらいことかもしれない、と静かに言って姿を消し、舞台は暗転する。この場面は、教科書掲載においては省略された箇所であるが、被爆し、亡くなった者の原爆に対する怒りが表現される重要な場面である。竹造の痛みと怒りは、「願う娘」ととつて、葛藤と被爆の記憶を乗り越えるのに不可欠な痛みと怒りであるわけであるが、その痛みと怒りの大きさを美津江と竹造がともにここで再認識するからこそ、しあわせを願うこと、記憶を乗り越えることの難しさに突き当たるのである。被爆の傷は深く、重く、凄惨で、他人が簡単に「乗り越える」などと口にできるものではない。それを、美津江と竹造が確認するのが二幕なのである。

### ―語りかける―

そうして、三幕は、雨が降っている。二幕の翌日の8月2日木曜の正午すぎ。竹造は、茶碗や鍋を持ち出して、屋根から漏る雨を受けとめている。美津江と竹造の心に降る雨、それを竹造は一人歌を口ずさみながら受けとめている。この三幕の最初は、美津江と竹造の関係の反転が見られる場面でもある。静かに降る雨は、美津江だけでなく、竹造にも降っているのである。前夜、被爆の苦しみ、怒り、それを口に出した竹造は傷ついている。しかし、文机の上に、美津江の木下へ向けた手紙を見つけ、その内容に竹造は元気になるのだ。につこりする。ここでは、美津江の木下への積極的な行動に、竹造の方が力を取り戻す。前夜の竹造に対する美津江の、直接的ではないが、いたわりがある。

竹造が力を取り戻した美津江の木下への手紙は、原爆資料を自宅で預かるという内容で、また、脇付けには「みもとに」とあり、そこに木下への思いがあらわれていると、竹造は美津江に迫る。この日美津江は、昼休みに「じゃこ味噌」を持って木下に会い、保留した原爆資料保管に関わる回答をするはずであった。しかし、約束をしたにもかかわらず、美津江は何も言わないで帰ってきてしまった。じゃこ味噌もそのまま持ち帰る。三幕の竹造の美津江への叱咤、励ましには強さがある。「自宅へ資料を置いてよい」と木下との個人的なつながりを美津江が結ぼうとするのには、美津江に原爆病の可能性が今後あってもということ、子が生まれてもということをも木下が、直接的な言葉ではないにしても、すでに言及していることが明かされ、美津江は木下の自分へ向けられた思いに確信を持っているからである。だからこそ、葛藤は大きく、恋から引き返そうとする美津江の抵抗も強くなる。それに連動して、竹造の励ましも強い台詞となるのだ。「木下さんに会ってはいけない」と繰り返す美津江は、竹造を前に改まりその理由を



語る。

ここで、美津江が幼少期に母親を亡くし、父親との二人暮らしで育ったという身の上であること、原爆で父を亡くし天涯孤独であるということは、美津江の再生を考える時重要だ。この三年間、美津江は誰とも父親を失った悲しみ、被爆の苦しみを共有していない。おそらく誰にも語っていないだろう。もちろん、被爆という、想像できないトラウマ、大切な人を失った苦しみを、人に語るということは難しい。それでも、この三年という時がちょうど経った今、美津江の心の蓋が木下さんにより開かれた。そこにあることを語らなければ、そこにあるトラウマに向き合わなければ、美津江は、新たな関係性を結び、そこで新しく生きていくことはできない。その時、語りかける相手は、美津江にとって、喪失の悲しみの対象そのものであるが、美津江に愛情をかけ育ててくれたただ一人の人、父、竹造であるのだ。作品の冒頭、稲光をこわがり、おとつたんのもとへ逃げ込む美津江の姿は、そういった意味でも象徴的である。美津江にとって確固たる安全基地である竹造の、その愛のもとで美津江は、三年前の八月六日の朝を語る。B29を父と見上げたこと、女専の友だちの死とその母親からかけられた言葉。自身がしあわせになつてはいけないと思う理由、生きていては申し訳ない、生き残るのが不自然だ、という思いを美津江は竹造に語る。竹造は、父親として、そんなことは口にするなど叱りながらも、「死んだ者はそうよには考えとらん」と、美津江の苦しみを受けとめる。一度上がった雨が再び降り出す。

#### ―ゆるされる―

四幕の冒頭は、さらに翌日、8月3日金曜日の夕方六時である。ここではすでに美津江が「自宅で原爆資料を預かる」という手紙を木下へ速達で送っており、それを受けて、木下がオート三輪で美津江の家へ原爆資料の運び込みを行っている。美津江の家の軒先には、高熱で奇妙に歪んだ徳利、八時十五分を指したまま止まっている丸時計などがたくさん置かれている。今、木下は、残りの物を下宿へ取りに帰り、再びこういった物を置きに来ようとしている場面である。夕方の六時。美津江は、木下に、そのまま夕飯を食べてもらおうと、ビールを買い、醤油めし、じゃこ味噌、真桑瓜を用意している。前日、三幕の竹造とのやりとりから一気に、木下への気持ちや固めたように見える。竹造も、真夏の一日を終えた後、石灯籠など重い物を運ぶ作業をして家にやって来る木下のために、風呂を沸かす気の利かせようである。このまま、美津江は木下と幸せになれる、それを十分に予感させる四幕冒頭である。

だが、美津江にはさらに深く、向き合わなければならないものがあつた。それは、木下が運び込んだ、顔面が溶けた地蔵の首によつてもたらされる。美津江はその地蔵の首を見て、今、木下のために包丁を握っていたにもかかわらず、突然

家を出る決意をする。二度と木下には会わない、そう決めて、今、家にやって来ようとしている木下へ置手紙を、死んだ友達と揃いの鉛筆で書こうとする。その決意に、竹造は、鉛筆をぼきりと折って、美津江に、おまえは生きている、生きなければいけないと諭すが、それをきっかけに、美津江に忘れていた記憶が蘇るのだ。それは、爆風で家の下敷きになった竹造との別れである。竹造は、原爆が炸裂した瞬間を見上げており、顔面に、その地蔵と同じように、ひどいやけどを負っていた。火が迫り、二人は別れなければならない。その記憶を、美津江は三年間「忘れていた」。それを、今この時に思い出したのだ。ここに、美津江の傷の深さとともに、その最も深部にある出来事に向き合わなければ、本当にしあわせにはなれない美津江の過酷さがある。それは、まさに木下によってもたらされ、竹造のもとで行われる最後の喪の作業である。

さらに、ここで原爆により無残に溶け焦げた地蔵の首と、竹造の死に際の顔が重なることには大きな意味がある。顔面に原爆の熱線を浴び、爆風で吹き飛ばされた家の材木にくみしだかれた竹造に火が迫る。その竹造、「亡くなった者たちの代表」に美津江はゆるされる。ゆるされる、という慈悲、愛を、美津江は竹造との過酷な別れを再演し、受けとるのである。同時に、自身の生きる意味を竹造から受けとる。それは、戦争、原爆による、美津江と竹造のようなむごい別れを、覚えていくこと、伝えることである。そして、自身の生きる道の前に見て、初めて美津江はしあわせになることもまた受けいれる。美津江の久しぶりの笑顔に、竹造は奥に消える。「おとったん、ありがとありました」という美津江の言葉に、木下のオート三輪が近づく気配が重なり、幕はおりる。

### (3)『父と暮せば』を読んで

ノーベル平和賞受賞講演で、被団協代表の田中熙巳さんは、「十年先には直接の体験者として証言できるのは数人になるかもしれない」と述べた。2025年は戦後八十年の年となる。田中さんは、被団協の礎を築いた人たちがすでに亡くなっていることに触れ、「(ノーベル平和賞受賞が)あと十年早かったら、喜びを共有できた。あなたたちに対する受賞でもありますよと伝えたい」と語っている。美津江と竹造のような被爆の体験が語り継がれることには、八十年の歲月の中での、被爆した人々の想像できない苦しみと、痛みながら絞り出す努力の積み重ねがある。

今回、二年生で授業を行い、多かった生徒の感想として「生き残ればいいと、前ならば思ったが、違った。生き残った人にも深い悲しみ、苦しみがあったとわかった」というものがある。竹造は、人間のかなしかったこと、たのしかったこと、それを伝えるのが図書館に勤めるおまえの仕事だ、と伝え、「わしの分まで

生きてちよんだいよオー」という最期の言葉を美津江に思い出させた。死んでこの世にはいない人たちの声、過去を知り、覚えていること、記憶を引き継ぐことが、人間にとって大きなテーマである。「おとつたんと、押入れと、座布団があれば、ピカピカがこようがもう大丈夫」と、稲光の閃光を怖がる美津江に竹造は言う。稲光にはそうも言えるかもしれない。だが、「ピカ」には、原子爆弾を前にしては、人間はとも大丈夫ではない。全く大丈夫ではない。人間の皮膚は薄く、肉体は弱い。心も時に深く傷つく。そうであるから、人間が何ができるのかを考える戦後八十年にしたい。

美津江、竹造、木下、この名づけには、作者井上ひさしの広島への思いが読み取れる。二幕冒頭で美津江が読む「おはなし」にもあるように、広島は市内に六つの美しい川が流れる「水の都」である。美津江の三文字は、美しい川の岸辺である。その川の水を求めて、多くの人が川で、川辺で亡くなった。広島は、原爆投下直後、五十年は草木が生えないと言われた。「竹」と「木」には、その草木が美しく伸びる力が託されている。竹造がつくり出した愛を、木下は守り続けるだろう。

美津江と竹造の言葉が、生徒たちの心の中で生きていつてくれればと思う。

#### 参考

大和ミュージアム公式ページ

毎日新聞（2024年12月10日）

『トラウマのことがわかる本』 白川美也子

講談社 2019年